

寒冷地形談話会通信

1995年度 第1号

1995.04.05発行

事務局：〒113 東京都文京区本郷7丁目3-1
東京大学大学院理学系研究科地理学教室内
寒冷地形談話会事務局（担当，青木）
TEL. 03-3812-2111 (EXT.4580)
FAX. 03-5684-0518（地理学の事務室）
e-mail. kent@geogr00.geogr.s.u-tokyo.ac.jp

・12月の例会報告

昨年12月17日（土）に例会と毎年恒例の今年1年のスライド大会が行われました。また，例会後は忘年会となり，若手からベテランまでの参加があり，大変盛り上がりました。遅くなりましたが，内容の報告を行います。また，2月例会の報告に付きましては，出来る限り早く報告を行いたいと思っています。事務局の怠慢で申し訳ありません。

演者・演題 青木賢人（東大・地理・院）

「最終氷期極相期～新ドリラス期の中央・南アルプスの氷河地形と均衡線高度」

氷河地形は古気候を反映する地形であることから，古環境復元にとって重要な指標である。氷河地形に基づいた最終氷期の古環境復元を行うためには、

- ① 氷河地形の形成条件を「地形的条件」と「気候的条件」に分離する
- ② 地形形成年代を詳細に分離し、編年・対比を行う
- ③ 広域の調査を行い、調査者による地点間の条件の不一致をなくす

ことが必要と考えられるが、これらはこれまでの古環境復元の際には考慮されていなかった。そこで本研究では以上の3点を明らかにすることを目的とし、中央アルプス、南アルプス全域の新期氷河地形について、モレーンを構成する礫の風化皮膜の厚さ、シュミットロックハンマー反発値を計測し、氷河前進期の年代推定と対比を行った。その結果、両山脈の全域で最終氷期後半の亜氷期中に大きく2期の氷河前進期が認められ、それぞれ最終氷期の極相期（LGM期，20ka前後），晩氷期の新ドリラス期（YD期，11～10ka前後）に対比されると考えられた。

次に、この編年に基づき、LGM期，YD期のそれぞれに対比される氷河地形の形成条件の推定を行った。その結果、

- ① 地域，形成時代に関わらず、各氷体の均衡線高度は基本的に稜線高度によって規定され、稜線高度から200m以内に各氷体の均衡線高度が成立する
- ② 南アルプスのLGM期には標高3,000m以上の稜線部について、約2,800m付近に気候的雪線が成立していた
- ③ 両山脈の全域で氷体の分布が稜線東斜面に偏る
- ④ LGM期からYD期への氷体の方位の移動が中央アルプスでは北東向きであるのに対し、南アルプスでは南東向きの氷体が見られる

の4点が明らかとなった。さらに、これらの結果を考慮した上で最終氷期の古気候復元を試みた結果、

- ① LGM期には中部日本の太平洋側は降水量が著しく減少していた（現在の50～70%以下）可能性がある

- ② LGM期には南アルプスまで西風下での降雪が見られたことから、両山脈とも冬季には北西季節風の勢力下にあったと推定される
- ③ LGM期には南岸低気圧の勢力が減退していた
- ④ 中央アルプスはYD期も北西季節風の勢力下にあった
- ⑤ 一方、南アルプスはYD期に南岸低気圧による多降雪域に入った。このことから、南岸低気圧の勢力回復が示唆される

などの点が示された。

以上の考察では、氷河の形成・分布は気候的条件のみで規定されていないことを示し、氷河地形の分布に基づいて古環境復元を行う際には、氷河の形成条件を局地的な「地形的条件」と広域的な「気候的条件」とに分離する必要があることを指摘した。さらに、この点に基づく古気候復元の可能性と資料を提示し、従来の研究からの要請にも応えたものとする。また、YD期の氷河前進が太平洋側高山の広範囲で認定されたことは、日本列島周辺域の古環境復元へ寄与するのみならず、この時期のグローバルな気候システムの解明にも貴重な資料になるものとする。

文責：青木賢人

・昨年度の活動報告

先日、筑波大学で行われました日本地理学会春季学術大会会場で、簡単な集会を開き、昨年度の活動報告を行い、今年度の事務局を引き続き東大が引き受けることで承認を頂きました。以下に、当日お配りした活動報告を掲載します。

1994年度 寒冷地形談話会 総会資料

1) 本年度の例会発表者

6月18日 (南米特集)

長谷川裕彦氏 「アンデス、アコンカグア山周辺の氷河地形」

水野 一晴氏 「熱帯高山のお話」

10月22日 (蛇紋岩地特集)

小松 陽介氏 「蛇紋岩地形の特徴とその形成についての予察的研究」

中新田育子氏 「蛇紋岩地域の植生」

11月19日 (スピッツベルゲン特集、気候コロキウムと合同例会)

五十嵐 誠氏 「雪氷コアから見た北極域の過去数百年における気候・大気環境変遷」

澤口 晋一氏 「スピッツベルゲン島の小氷期モレーンについて」

12月17日

青木 賢人氏 「最終氷期極相期-新ドリマス期の中央・南アルプスの氷河地形と均衡線高度」

2月24日 (チベット特集)

岩田 修二氏 「雲南・東南チベットの氷河地形と最終氷期の環境」

小野 有五氏 「チベット高原北部・東部での氷河地形・段丘・レス

ー最終氷期にチベット氷床はあったかー」

の、計9氏です。ご発表下さった皆様、本当にありがとうございました。今年度は、年度前半の例会が少なく、ご不満だったことと思います。来年度は、もう少し、例会の数を増やしたいと思っています。

また、海外調査に行かれた方、学会発表の前に寒冷地形で・・・と思っている院生、卒論のアイデアがほしいと思っている学部生の方がいましたら、事務局までお知らせ下さい。例会を設定したいと思います。

2) 夏の学校の報告

今年度の夏の学校は、通信3号でお知らせしたとおり、「火山噴出物に基づく噴火史の復元と高山地域の土砂移動」をテーマに、白山において8月18～20日に行われました。案内者は守屋以智雄氏（金沢大）、島津 弘氏（金沢大）、奥野 充氏（名大・院）の各氏にお願いいたしました。来年度は、小岩清水氏をメインの案内者として富士山で行うことを予定しております。ふるってご参加下さい。

3) 名簿の作成

今年度は、遅くなりましたが名簿の発行を行いました。情報量が少なく、皆様にご迷惑をおかけしました。情報の伝達速度が上がっておりますので、fax番号や電子メールのアドレスをお持ちの方は、事務局までお知らせ下さい。名簿の内容はさらに更新していきたいと思っています。また、来年度も発行を予定しています。

4) 会報

今年度は例会が少なかったこともあり、会報が皆様のお手元に届く回数も少なくなっていました。来年度は例会の設定同様、がんばっていききたいと思います。また、昨年度から引き続き行っています「山岳气象台」も好評なようですので、来年度も継続したいと思います。山岳气象台に限らず、皆様の投稿や事務局に対するご意見などをお待ちしています。会報を会員の意見交換の場としていきたいと思っています。また、寒冷地形談話会北海道支部からの連絡も事務局の報に頂いていますので、その活動の報告も行うようにしたいと思います。

5) 会計報告

本年度の収支決算は以下の通りとなりました。例年、会計報告をきちんとしていませんでしたので、今後はこのような形で明確にしていきたいと思っています。

今年度は、例会の回数が少なかったこともあり、通信費（談話会通信の作成・郵送費）がかなり少なくなっているものと思います。しかし、今年度は郵便料金的大幅な値上げが行われたため、支出そのものは大きくなっています。今年度の単年度では赤字会計となっていますが、前事務局の学芸大の努力（印刷費をかなり浮かせていた様子）で繰越金がかかなり多くなっていますので、来年度の会費も今年度同様に1,500円で据え置きをしたいと思っています。

<u><収入></u>		<u><支出></u>	
会費収入	¥114,500	通信コピー・発送	¥ 96,235
前年度繰り越し	¥150,082	通信費	¥ 2,860
		文具	¥ 20,372
		名簿コピー	¥ 2,114
		来年度へ繰り越し	¥143,001
今年度収入合計	¥264,582	今年度支出合計	¥264,582

来年度も宜しくお願いいたします。

事務局：東京大学大学院理学系研究科 地理学専攻内
担当 青木賢人（D1）